

2002年度渥美奨学生紹介

アブリズ イミテ 「環境科学の路へ」-----

白 寅秀 「アジアの成長を流通の目で見直す」-----

陳 姿菁 「私の目指す台湾の日本語教育」-----

曹 奎煥 「地質学者と社会貢献」-----

胡 炳群 「私は山中から来た留学生」-----

イコ プラムディオノ 「私なりの小さな国際交流：外国人研修生問題取り組みと
将来の夢について」-----

マンダフ アリウンサイハン 「日本研究の専門家を志して」-----

ランジャナ ムコパディヤーヤ 「現代社会と宗教」-----

朴 榮濬 「私はなぜ国際関係を研究しているのか」-----

孫 建軍 「新漢語の背後にはドラマがある」-----

王 溪 「インターネットに魅せられて」-----

于 曉飛 「民族のルーツを探る」-----

環境科学の路へ

アブリズ イミテ
Abliz Yimit

出身国：中国（新疆ウイグル自治区）

在籍大学：横浜国立大学大学院環境科学研究センター人工環境システム専攻

博士論文テーマ：薄膜複合光導波路に基づいた高感度化学センサーに関する研究



私は新疆ウイグル自治区コムル市郊外の農家で生まれ、地元で小、中、高等学校を卒業し、1978年に新疆大学化学科に入学しました。1983年(中国語予備科1年、大学4年制)優秀な成績で卒業し、新疆大学化学科に教師として採用されました。自分の理想的な職場で、条件が許す範囲内で研究と教育に努力を重ね、助手、講師を経て1994年に新疆大学の最も若い助教授となりました。

当時の自分の研究欲望と職場での研究条件などを考え、優秀な研究者達らの御指導で、科学研究の訓練を受けるために、留学することを決意しました。私は大学生の時代から戦後の日本の高度成長に興味を持っていたので、留学先としては、経済、科学技術的にも世界をリードし、人類社会の平和や発展に大きな貢献をしている日本を選びました。

私は、厳しい学力や人格などの競争選考をクリアし、1996年4月新疆ウイグル自治区政府の派遣(日本私大協会の協議に基づいて)で来日し、明星大学で2年間研究を行いました。

この間、母国の現状を冷静に考え、国内の状況を外部から見ることでました。近年、中国の経済発展、特に石油、天然ガス開発、人口増加などに伴い、元々水源の少ない乾燥地区である新疆ウイグル自治区の砂漠化、農地の塩類集積化、大気及び水などの汚染が非常に深刻な状態になり、癌などの病気が増加しています。私は、母国のために役立つのは環境科学の知識と環境保全に関する研究方法であると認識したため、環境科学の分野で学位を取得することを決意し、1998年4月に横浜国立大学院工学研究科に入学しました。

今は、極めて低濃度の環境汚染物質の計測が必要となっているため、光通信などで用いる光導波路とその高感度化学センサーへの応用について研究を行っています。化学センサーは、農業、工業、省エネルギー、医療、食品など、特に環境保全の分野で幅広く利用されています。

私は博士学位を取得後帰国し、日本で身につけた知識と研究実力を活かして、新疆大学の環境教育、研究レベルの向上により、人々が自由で、平和に暮らせる豊かな社会を作るために力を尽くしたい。同時に、国民の環境保全意識を高め、祖先が私達に残してくれた“美しい地球”を、次の世代にも美しいままで残しておくために自分の人生を捧げたいと思っています。また国家、民族、宗教などの壁を超え、世界の平和と発展のために国際理解と国際交流にも精一杯頑張っていきたいと思っています。

アジアの成長を流通の目で見直す

ベック インス
白 寅秀

出身国：韓国

在籍大学：早稲田大学大学院商学専攻

博士論文テーマ：後発国の流通機構変革プロセスに関する比較考察



私は韓国で高麗大学の経営学部を卒業した後、日本の早稲田大学大学院に留学している白寅秀と申します。私が最初に日本に対して興味を覚えるようになったのは、渥美清主演の「男はつらいよ」という日本の映画を見たことから始まります。最初、私の名前にも寅さんという名前があったという個人的な一体感から日本への関心が芽生えたものの、その後、寅さんが演じる日本の文化と日本人にまで興味を示すようになりました。

幸いにも、奨学金の受給という特典に恵まれて、専門的な研究を日本で始められるようになったのは、次のような理由があったからです。それは、私の専門分野である社会科学、その中でもアジアという環境条件に制約される社会的な現象が、いち早く同様な経験を体験してきた日本ではどのような経路をたどって来たのかを身近に学習したかったからです。

日本は、ご承知の通り、明治時代頃から、欧米先進国から異質な制度や技術を導入し、自国の状況に合うような試行錯誤を重ねることで、日本独自の仕組みを作り出してきました。これこそ韓国の留学生が習得すべき日本のエッセンスであり、アジアの諸国が欧米先進国をキャッチ・アップするためには必ずといっていいほど、日本で凝縮して蓄積されている日本事情を身に付けなければならないと思いました。

実に私の研究テーマである流通の問題は、消費者のニーズと生産者の行動によって大きな影響を受ける分野であります。下町の人情味あふれる寅さんに魅了されてから興味をもつようになった日本への関心は、今や日本人の消費パターンの変化、生産様式の変化、そしてそれによってもたらされる流通取引

の変化という側面まで研究を進めるようになりました。このような私の異国での経験と学習は、同じアジアでありながらも独自の流通機構に変容してきた韓国の事例をさらに掘り下げのに、貴重な視角を与えてくれました。

現に、以上のような視角に基づいて博士論文を作成中であり、今年の秋には博士論文を提出する予定です。私は博士号を取得した後、韓国の母校で教鞭をとる計画である。その際、今まで韓国政府のシンクタンクで研究員として働いた実務調査の経験と、日本の大学院で磨いてきた学術的な経験を両方とも生かし、対外的にはアジア諸国の流通政策に役立つ活動をしながら、学内では研究者や教師として学問の進展に寄与し、学生の指導に充実したい。

最後に一言、学問の世界のみならず、日韓交流の場においても私の使命を果たしたい。日本の寅さんはいなくなり、これ以上日本を語ることはできませんが、私、韓国の寅さんがその後の日本を語りつづけることを望みます。

私の目指す台湾の日本語教育

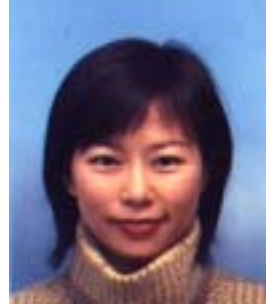
ちん しせい
陳 姿菁

出身国：台湾

在籍大学：お茶の水女子大学人間文化研究科 国際日本学専攻

博士論文テーマ：日本・台湾におけるあいづちの対照研究

- 言語の普遍性と個別性から -



台湾と日本は歴史的、また地理的な要因で古くから深い関係を持っており、日本は台湾文化の中で特別な位置付けにあります。そのような背景も手伝って、私は何時の日か日本に興味を持つようになり大学で日本語学科に入りました。4年間の勉強で、日本語をマスターできると思いましたが、いざ日本人に会うと、日本語を話せなかったり、あるいはやっと一言話せたとしても、その続きが出てこなかったりすることがしばしばありました。また、教科書に載っている日本人の習慣や日本語の使い方など、実際に来日したときには通用しなかったりすることもありました。

このような経験から、学校で受けた教育が実際の社会では応用できないことに気づいた私は、日本語のコミュニケーション能力は、どうすれば向上するのかということに興味を持つようになりました。台湾は地理的な関係で、日本からの影響を大きく受けており、日本語学習人口は急激な増加傾向にあります。そしてその大多数の学習者が一番望んでいるのは、効率良く日本語コミュニケーション能力を向上させたいということです。彼らのニーズに応えるために、台湾の言語環境や社会状況にあったカリキュラムや教授法の確立は切実な問題となっています。

私はこれらの事を実現するために、最先端の日本語教育を学び、台湾の日本語教育に新風を注ぎたいと決意し、来日致しました。

以下、話題は変わりますが博士号取得後の私の展望です。博士号取得後は台湾の日本語教育現場に戻り、台湾における日本語教育の改革を行いたい所存

です。私が台湾で受けた日本語教育というのは非常に伝統的な教授法で行われたもので、先生方も日本語教育出身者が少ないため、台湾の日本語教育はまだ未成熟していると言いきれない状況です。そのため、日本で学んだ教育法を基に、台湾の言語環境に適したカリキュラムを組み立てたいと思っています。

例えば、今まで、大学での日本語教育のコースデザインの多くは進学や研究者育成の為のものでしたが、実際には進学する人は少なく、半分以上は就職の道を選んでいるのが現状です。彼らが一番望んでいる事は、学校でもっと日本語のコミュニケーション能力を身につけられれば良かったというものでした。これらの要望に応えるためにも、会話授業などコミュニケーション能力に関する授業にもっと重点を置かなければなりませんし、学生のニーズに合わせたコースデザインは今後台湾の日本語教育界に必要になってくるはずです。

以上のような視点から、台湾における日本語教育を全面的に改善して行くことが今後の夢でもあり、目標でもあります。

地質学者と社会貢献

チョウ キュウファン
曹 奎煥

出身国：韓国

在籍大学：早稲田大学理工学研究科環境資源及材料理工学専攻

博士論文テーマ：大陸地殻の形成 - 成長 - 変形 - 進化過程の解明及び最上部地殻における活断層の運動時期を決定する方法論に関する研究



私は小学生のころから地球科学にかなりの興味を持っていました。さらに、私は日本語も大変好きだったので大学は日本文学科(韓国)へ入学しました。大学2年の時に、日本語を専攻する学生ならばだれでも目指している、一番難しいと言われている「日本語通訳案内員」の資格試験に合格しました(学生としては初めて、最年少合格者)。私はその時点で目標を失い、兵役(約3年間)に入り、春川(韓国の北東部)病院で勤務しました。病院長や医者との交流や患者を看護する中で、「人間が世の中にすべき役割は、社会や人類に何らかの形で貢献することである」という新しい人生目標の設定が、兵役が終わりかけたころできました。

そこで、私は研究や日常生活をする上で十分な日本語の能力を持っていることから、早くしかも正確に研究が始められる好条件と、私は地質学に大変興味がありましたので、世界でも優秀な地質・地震研究が行われている日本で地質学を勉強することを決意したことが留学の動機です。

私の青少年期の夢は大学の教授になることでした。その理由は大学の教授は仕事がなさそうで、冬・春・夏休みがあり、たっぷり休めるものだと思い込んだ時期がありました。しかし、今もその夢は変わっていませんが、言うまでもなく、その理由は変わっています。

将来、日本で研究してきた地質学全般(韓国では見られない活火山やプレート境界部の地質学)と専門知識(地球における地殻の変形過程の解明と地殻浅部における断層の運動時期を決定するための方法

の研究)を十分に活かして、人類の最大の目標と言っても過言ではない「地震の予知」に貢献できることだけではなく、これらから得られた貴重な研究成果と経験(カリフォルニア州立大学で一年間経験)を、韓国の大学で地質学を目指す若手研究者の養成、自然災害の防災に関する国の政策への提案、そして最も重要なことは、私の第二の母国とも言える日本との知的交流に幅広く貢献していきたいことが将来の目標であり、使命であると考えています(私の長所は「知的好奇心がある、しつこくせまる、楽天的である、やる気がある」であり、以上に述べたことが十分可能であると信じています)。

最後に、2年前になくなった私の父は「虎は死んでその皮を残す、人は死んでその名を残す」と私にいつも言いました。まさに、そのとおりであると同感しています。私が研究している専門分野において、その名を残すことが社会貢献の実現であり、親孝行であると考えています。これからも専門分野における研究活動と国際交流活動に積極的に取り組んで頑張りたいと思いますので、今後とも家族の限らない支援と指導教官からのご指導、渥美国際交流奨学財団のご支援とご助言のこと、どうぞよろしくお願いいたします。

私は山中から来た留学生

こ へいくん
胡 炳群

出身国：中国

在籍大学：日本工業大学大学院工学研究科システム工学専攻

博士論文テーマ：除去加工法における工具寿命及び加工特性向上に関する研究



私は胡炳群です。1968年6月9日生まれ、中国貴州省の少数民族地方の(トン族)出身です。1990年に北京航空航天大学を卒業し、中国貴州航空工業集団総公司西南工具総廠に就職しました。1995年8月に中国科学技術協会から技術研修生として選抜され来日し、埼玉県の中陵樹脂工業(株)で1年間の研修を行いました。研修を終え帰国しましたが、より高度な知識や技術を学びたいと思い、1997年4月に日本へ私費留学しました。日本工業大学留学生別科で日本語を一年間勉強し、1998年4月より同大学大学院修士課程に入学しました。2000年3月に同課程を卒業後、同年4月より日本工業大学大学院博士課程に進学し、現在に至っています。修士課程在籍時より鈴木清研究室に所属し、生産加工現場における環境に優しい加工技術の開発の研究を行っています。

日本留学を決めた理由

私の故郷である中国も工業技術の点で日本に迫りつつありますが、以前より、日本から学ばなければならないことがたくさんあるのではないかと感じていました。日本での技術研修を通して、更により高度で最新の技術を学びたいと考えたのが留学の動機の1つです。

また、私はこうして幸運にも日本へ留学することができましたが、私の生まれた地方は、「天に三日の晴なく、地に三里の平ない」といわれる特徴の山岳地帯です。経済的に恵まれているとは言えず、教育環境も十分に整っていないのが現状です。学びたくても学べない人々がたくさんいます。こういった人

達の手助けになりたいと思ったことも留学の動機です。

博士号修得後の進路希望

現在、私は日本工業大学、鈴木清(先端素材加工)研究室に所属しています。私が所属する研究室は新しい加工技術の開発を研究テーマとしています。

私は、修士課程からこれまでの三年半の間、「除去加工法における工具寿命および加工特性向上に関する研究」を行ってきました。研究活動を通して様々な知識を得ると共に、研究者としての考え方を学んで来たつもりです。博士号修得後は、留学動機の一つでもある、教育者の道へ進みたいと考えています。祖国へ戻り、日本で吸収した知識を広く伝えたいと思います。

私なりの小さな国際交流：外国人研修生問題取り組みと将来の夢について

イコ プラムディオノ
Iko Pramudiono

出身国：インドネシア

在籍大学：東京大学大学院工学研究科電子情報工学専攻

博士論文テーマ：大規模超並列データマイニングによるモバイル Web パーソナリゼーションの研究



私は六人家族の長男として中央ジャワ州に生まれましたが、青春の大半をパレンバンというスマトラ島の町に過ごしました。高校に入る時に少しでも良い教育が受けられるように親から離れ、インドネシアの首都ジャカルタで一人暮らしをはじめました。

インドネシアは他のアジアの国々と同様、日本から経済発展の手法を学び、それを模範にしてきました。私も日本製品からその技術の高さにひきつけられて、憧れるようになりました。これだけの技術力は本を読むだけでは取得できず、それを生み出す考え方や、環境、習慣も文字通り体を張って吸収しなければならないと思いました。そのため、いつか日本に行って、技術や国の発展のための知恵を直接身に付けたいと願っていました。

ただ、留学するための資金がなかったため、高校卒業が間近になった時にいくつかの奨学金に応募し、やっと念願の日本留学が果たせました。現在に至るまで三分の一の人生を日本で過ごし、もはや日本は第二の母国のようなものです。

日本での活動

勉強以外では中学校の時から課外活動に積極的な方で、来日しても留学生協会の運営やインドネシア電気電子情報学会の設立に携わってきました。とにかく人との関わりが好きで、それによって社会に少しでも役に立てればと思っています。

現在取り組んでいる外国人研修生の問題も、初めは研修生として来日したインドネシアの青年たちと仲良くなったことで、彼らの悩みをよく知るように

なりました。日本で彼らを待ち受けているのは技術を身に付ける研修ではなく、安価な労働力として彼らを利用したい企業です。その上、労働法はおろか日本語すらほとんど分からないことをいいことに、差別や過酷な待遇を強いられることがまれではありません。「日本に騙された」という彼らの言葉を聞いた時、非常に残念な思いをしました。それが「研修生問題ネットワーク」での活動のきっかけとなりました。

将来に向けて

PC クラスタ上でのデータマイニングは極めて実用的な研究だと言えます。PC クラスタとは、パソコンを多数相互接続することで巨大計算機と同等の性能が得られる技術で、少ない資金で構築可能なだけでなく、システムの拡張性にも優れており、ネットワークの急速な発展に適しているシステムだと考えられます。母国に帰り、その技術を応用したデータウェアハウス会社を立ち上げることが私の夢です。Web による企業アウトソーシングが主流になりつつあるので、日本をはじめ、世界中から顧客を集めるチャンスも広がるでしょう。特に日本の携帯電話ユーザを対象にするサービスは、大きな可能性を秘めています。技術サイクルが早く、持続的な技術開発が不可欠ですが、インドネシアの豊富な人材を生かし、優秀な技術者を多く育てたいと思います。

日本研究の専門家を志して

マンダフ アリウンサイハン
Mandah Ariunsaihan

出身国：モンゴル国

在籍大学：一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻

博士論文テーマ：ノモンハン事件前夜におけるモンゴルをめぐる日ソ対立と
モンゴル人粛清問題



私は 1966 年生まれで、モンゴル・ウランバートル出身です。母国語はモンゴル語ですが、読解可能な外国語は日本語、ロシア語、英語、中国語の四カ国語にわたっています。現在、一橋大学大学院博士課程地域社会研究専攻に在籍しています。研究課題は、「ノモンハン事件前夜におけるモンゴルをめぐる日ソ対立とモンゴル人粛清問題」です。1937 年～39 年にモンゴルでおこった大規模な政治的粛清の真相とその背景的要因について、戦間期のソ連・モンゴル・日本の関係史に焦点を絞り研究しています。

私は、1988 年までモンゴル国立大学社会学部で、国際関係史、民族学、言語学を専攻しました。1990 年から一年間、北京・語言学院で中国語、中国現代史を学びました。帰国後の 1991 年から、モンゴル科学アカデミー歴史学研究所に研究員として 2 年間働き、戦間期の日本・モンゴル関係史を研究していました。その当時は日本語の文献を読むことができず、英語、ロシア語で出版された文献、新聞などをもとに研究をしていました。

しかし、研究する中で、モンゴルの日本研究者の数は少なく、また彼らの日本語能力もそれほど高くないことも知り、自身が日本語を学び、直接日本の資料にあたることの必要性を痛感するようになりました。特に、私が研究をはじめた当時は、ちょうど冷戦終結直後で、これまで停滞していたモンゴル・日本の関係が新たな段階に進もうとしていた時期でしたから、日本語の第一次資料を用いず日本研究をおこなうことは、今後ますます困難になっていくことは明らかでした。そこで日本への留学を決意し、

1994 年に来日しました。一橋大学では、モンゴルの事情にも詳しい田中克彦先生と戦時期の日本史研究者吉田裕先生に師事し、また田中先生退官後は戦前の日本・ソビエトの国際政治関係史に精通している加藤哲郎先生から指導を受けています。

上記の研究活動に加えて、私はボランティア活動にもこれまで積極的に参加してきました。モンゴルでは、学生時代から農作物の収穫・草刈り・駱駝の疥癬の世話、小学校の補修工事など、農村部でのボランティア活動に、1999 年から海外職業訓練協会（OVTA）の海外職業訓練養成事業に通訳・講師のボランティアをするなど、通訳として日・モの国際交流に尽力してきました。

博士号を取得しモンゴルに帰国した後も、引き続き日本とモンゴルの交流関係の発展に貢献したいと思っています。具体的には、モンゴルの国立大学で教鞭をとり、これまで学んできたことをもとに、モンゴルの未来を担う学生たちの指導にあたる一方、日本の歴史や文化に関する資料の翻訳を通じて、日本語が分からない、日本に来ることができない多くのモンゴルの人々に日本の歴史と文化を紹介していきたいと考えています。

現代社会と宗教

ランジャナ ムコパディヤヤ
Ranjana Mukhopadhyaya

出身国：インド

在籍大学：東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻

博士論文テーマ：日本における「社会参加型仏教」への検討



私は、現在東京大学で宗教学を専攻しています。日本に留学することになる経緯には、「社会現象としての宗教」への関心、そして異国の社会、文化や宗教への興味があります。

私の出身国であるインドでは、宗教をめぐる様々な問題（例えば、原理主義、宗教間対立など）が存在しています。私はデリー大学の学部及び修士課程において社会学を専攻しており、社会学者として、現代社会における宗教の状況について強く関心を持っています。そして、インドと異なる歴史的・文化的文脈における「宗教問題」や「宗教の社会・政治活動」という現象が如何に出現しているのか、に関する検討を通して、我々は自分の問題を比較文化的な視点から理解できると思います。それ故、私は日本における宗教、とりわけ仏教団体の社会活動に関心をもつようになりました。インドのデリー大学 M.Phil. 課程においては日本学を専攻し、1997 年に「近代日本における宗教と国家の関係」というテーマの卒業論文を著しました。

博士課程における研究テーマは、「日本における社会参加型仏教の検討」です。普通、宗教の社会参加とは、教団による政治活動、原理主義的運動、他宗教徒との衝突などの形で行われていると考えられています。本研究では、日本における仏教団体の社会活動の考察を通して、宗教に内在している平和主義、普遍的志向そして社会や世界全体の救済に関する観念に焦点を当てたいと思います。そして、市民社会の構造及び世界平和の維持に対して、宗教がより良好な役割を果たすことができるということを明らか

にしたいと思います。私が研究対象として考えている仏教団体は、布教・教化など宗教活動と共に種々の社会活動も行い、それによって市民社会・公共圏において活躍しているからです。

現代は、宗教の社会的政治的潜在力に関する、より徹底的な知識が必要とされています。私の研究はこれに対する一つの試みです。従って、アジアと共に西洋における諸宗教についても研究を行い、宗教をめぐる諸問題の解決を模索することも私の将来の研究が目指すところです。つまり、これまでの知識を実践に移しながら宗教についてより深い研究を続けたい。従って、博士学位取得後は、宗教、国際理解などに関する研究を行っている大学・研究所等での就職を希望しています。なお、インドでは日本専門家が少数です。そのため、日本の社会や文化をインドに紹介できるような仕事にも従事したいと思います。

私はなぜ国際関係を研究しているのか

パク ヨンジュン
朴 榮濬

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科国際関係専攻

博士論文テーマ：海軍の誕生と近代日本 - 海軍革命・明治国家への変容・東アジア体制
変化のダイナミクスを中心に



ご飯を食べるとき、ふとこんな考えに至る時がある。食卓を飾るお米と野菜、そして魚などが食用として適合であるかどうか判るまで、どのような人間が長期間にわたって植物や動物の世界に対して観察してきたのだろうか。一つの野菜や魚が食用になるのを知るために、数多くの人間が毒茸やふぐの毒から被害を蒙らなければならなかつただろう。それは食べ物に限らなかつたはずであろう。人間が文明生活を営為していくすべての側面の上で求められる知識とは、長い間、無数の人間による観察や知慧が積んできた結果である。

そういう点からみると、知識の発見とその蓄積、言い換えれば学問の誕生とその共有は、人間を野蛮の状態から解放させて文明生活へ導いたもっとも大きな要因であつたといえよう。国際関係論、なかんずく日本政治外交史を専攻として選択した私は、私の青春をかけて取り組んでいる国際関係という学問を通じて、毒茸と食用茸を分別しえた無名の植物観察者の寄与した貢献のように、人類文明に寄与できる成果を挙げられるか自問自答する。

宇宙科学は、何ら間違いなしに人間を宇宙の世界に送り出しており、情報通信科学はコンピュータを通しての情報革命を成し遂げている。人文科学は数多くの文学・哲学書や芸術作品に潜められている思想やイメージのコードを解いており、経済学と法学は国家社会の経済的・法的制度の仕組みを巧みに組織している。これらに比べて国際関係論は、一見何も可視的な成果を挙げていないように見える。

しかし考えてみると、一国家の誤つた政策選択や

一政治家の間違つた政策決定が、その国家や個人の破滅のみならず、無数の人類に悲劇を招来してきた事例を我々は知っている。もしドイツのヒットラーが歴史のあの瞬間で、人種主義の代わりに人類の普遍的な価値や権利に目覚めていたら、あるいはある時期の日本が、アジア隣国や英米などの国々を殖民と戦争の相手ではなく共存協力の友人として考えていたら、20世紀前半に繰り広げられた人類の悲劇は起こらなかつたろう。毒茸に関する誤つた知識は限定された範囲の人間に被害を与えるが、国際関係における間違つた認識や選択は国家全体はもちろん、人類全体を不幸に落としかねない。そうした点から、国際関係という一見地味な学問は、その役割によって、実は人類社会の平和にもものすごく寄与できる性格を持っていることに間違いない。

ただ、国際関係という学問がその力を発揮するためには、一国の境界を越えて、どの国の政治家や人間にも受け入れられる普遍的なメッセージを持たなければならない。そのためには、他国の人間が有する考えや情緒を素直に接触かつ共感できる文化間の出会いが不可欠であろう。そうした点で、私が日本留学を通して異国の友人と触れ合いながら、国際関係、特に日本政治外交史を研究しているのは、一国の境界を超えて普遍的なメッセージに至る道程で得られた大きな幸運であると思っている。

新漢語の背後にはドラマがある

そん けんぐん
孫 建軍

出身国：中国

在籍大学：国際基督教大学大学院比較文化研究科日本語学専攻

博士論文テーマ：幕末日本漢語における漢訳洋書の受容と変容

- 西洋認識をめぐる用語を中心に -



私は高校を卒業するまで、江蘇省のある小さな町に住んでいた。地図から見ると、九州に最も近い位置にあるが、日本という国からは程遠い生活をしてきた。1986年、国際経済を希望したところ、何故か大学側に日本語科に振り当てられ、日本語の勉強を始めた。入門の時、発音の段階で、方言の助けがあって難なく「促音」が出来たので、少し興味をそそられたが、特に日本語が好きということにはなかった。

2年生の夏休みに、偶然古本市で『漢語外来詞詞典』という本を見つけた。日本の『外来語辞典』にあたるが、中でも日本語出自の見出し語がたくさん載っていた。哲学、社会、共産主義、国際、金融等、それまで現代人としての自分の思考を支える言葉の多くは、日本で作られたものであったことに目を奪われた私は、それから、すっかりこれらの「新漢語」の虜になってしまった。

1993年、短い大学院生活を終え、私は北京言語文化大学に就職した。それまでに蓄積した知識を学生に分りやすく説明する努力はしたものの、うまく学生に伝わらないことがたびたびあった。勉強不足を痛感した結果、私は日本留学を決意した。日本に資料がそろっていることが第一の理由にあげられるが、実際に日本で生活をし、現代日本の日常から近代を理解するのもいい方法だと考えたからである。

振り返ってみれば、1996年に来日して以来、資料館を回ったり、古本市に行ったり、ボランティアをしたり、学会で発表したりして、いろいろ母国で出来ない経験をした。今在籍中の国際基督教大学とい

う環境からも様々な刺激を受けた。母国を違う角度から認識することができたと同時に、自分を見直す機会も得たと考えている。

自分の研究もますます充実してきた。新漢語の成立にはそれぞれ素晴らしいドラマが背後に隠れている。日本と中国における西洋認識の異同をめぐり、一語一語を確実に解明できれば、日中語彙交流の歴史が明かになると期待している。今年は私にとって大事な一年となる。今までの研究成果をまとめ、論文を提出する年でもあれば、今後中国で研究活動を展開するために、いろいろ準備する年でもある。

中国では、新漢語の研究はまだ充分注目されていない。学位取得後、北京の大学で再び教鞭を取ることを予定している。これからは学生の納得した表情を目に浮かべながら、研究を続けていく決意である。

インターネットに魅せられて

おう けい
王 溪

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院電子情報工学専攻

博士論文テーマ：光インターネット構成法



高校卒業までの歩み

私は1975年(昭和50年)に中国東北地方の遼寧省で生まれました。両親が大学の先生ということもあり、家にたくさんの本があって、小さいときから読書が大好きでした。小学生のとき、大発明家エジソンや物理学者アインシュタインの伝記を読み、科学に興味を持つようになりました。中でも特に物理学の魅力に取り付かれて、高校卒業まで特殊相対論や量子力学などを独学で勉強しました。また、海外の大学で最先端の電子技術を学ぶという夢に向けて外国語の勉強も続けていました。

日本留学を決めた理由

海外留学の道を選んだ理由と、日本を留学先に選んだ理由それぞれについて簡単に述べます。海外に行きたいと思ったきっかけは、1989年の天安門事件でした。それまでは自分が世界で一番理想的な国にいると信じて疑いませんでした。この事件で初めて自分の無知に気づき、「本当」の世界を自分の目で見られるためには、幅広い情報が入手可能な海外に行かなければならないと結論付けました。また、世界トップクラスの電子技術を学びたいというねらいと、漢字文化を大事にするアジアの国という親近感から、日本を留学先に選びました。

日本での留学生活

学部の四年間は、同志社大学で電子工学を学びました。その間インターネットと出会い、大学院へ進

み、未熟ながら大きな可能性を秘めているこの技術に取り組みたいと決心しました。そのため、東京大学の電子情報工学修士課程に入り、「光インターネット」に関する研究をはじめました。そして、博士課程の今、提案方式を採用した世界初の「光インターネットプロジェクト」実現のために、日本国立研究機関と民間企業と連携し、研究開発を進めています。

博士号取得後の進路希望

先端通信技術の研究開発を続けるため、また、大学圏外の社会経験も積むため、まずアメリカにある日本企業の研究所に入りたいと思います。インターネット発祥地のアメリカで、共同研究を進めてきた日本企業との連携を維持しながら、アメリカなどの研究者も丸め込む形でより幅広い研究活動を進めたいと思います。最終的には母国に戻って、通信関連の研究開発事業と教育活動に従事したいと思います。

趣味及び研究外活動

カメラ、音楽、中国旅行などが趣味です。研究のほかに、留学生チューターを務めたり、時々留学体験や主張を雑誌と新聞などに寄稿したりしています。また、今年1月から英語学習の無料メールマガジン(日刊)を創刊しました。現在購読者は約1300名です。研究の合間にインターネット経由で日本中の方と情報と意見交換をしながら英語を学んでいくもので、今一番の趣味になっています。

民族のルーツを探る

う ぎょう ひ
于 曉 飛

出身国：中国

在籍大学：千葉大学文学部社会科学文化研究科

博士論文テーマ：中国東北少数民族の研究 - ホジエン族の言語と伝承文学



私は中国東北（旧満州）の佳木斯という所の出身です。子供の頃、父（去年 82 歳で亡くなりました）は「日本の関東軍が一番悪いな。村に入ると、人を殺し、民家を焼いたりしたよ！」と、よく話していたのを聴かされました。小学校 6 年生の時、歴史の授業のために、佳木斯の近くの鶴岡（石炭がよく取れる地方）に見学に行ったことがあり、そこで、「日本軍は石炭を取るために、中国人労働者を使い、病気になるたら、治療を受けさせず、生きたまま大きな穴に捨て、死なせました……。」と言う案内人の説明を聞きながら、大きな穴に埋められた沢山の人骨を見て、私は涙がぼろぼろ流れるのを止めることが出来ませんでした。少女の時、日本人は鬼のように怖いのだというイメージを心に深く植え付けられていました。

中国改革での開放政策で、何十年間も鎖国していた中国の門戸を開くことになりました。1990 年、私も日本に来る機会に恵まれました。社会主義と違う、狼のように労働者の血を吸う資本家の支配下にある日本、どんな国、どんな国民だろうと思いながら、私は、経済的に大きな発展を遂げている、中国に一番近い日本に非常に興味を抱くようになり、決心してそれまで勤めていた放送局のアナウサーを辞め、6 月 12 日に東京国際空港に降り立ちました。

日本での私は大学で勉強しながら、NHK 放送局で「中国語講座」を担当し、国際局のアナウサーになり、さらに、1994 年から日本の大学の教壇に立って、日本の若者に中国語を教える非常勤講師になりました。この十年間、日本で生活し、多くの日本人と出会い、そして親しく付き合っていく内に、私は、次第に日本のことこの民族の心を理解できるようになり、私はこの国を好きになるとともに、特にこの国の人々を好きになりました。そうしている内に、

私は、中国と日本の間の長い歴史における文化交流の源を探求し、それを明らかにして伝えて行きたいという気持ちが強くなってきました。

来日以前の十数年間、私は放送局のアナウサーとして、少数民族が住んでいる地域に度々取材に行きました。特に、中国で一番少数民族と言われているホジエン族が住んでいる処に取材に行きました。ホジエン族は中国黒龍江省の松花江下流、アムール川、ウスリ川の西側に住んでいます。昔は、漁労と狩猟採集で暮らしていました。ホジエン語は文字を持っていませんが、この民族は豊かな口承文芸を有しています。しかし現在は、漢語の普及によって、ホジエン語を話せる人は 65 歳以上で、その数も僅か 10 人ほどしかいません。民族の言葉が失われれば、その民族性も失われます。その民族の言語および文化の保存をし、更に深く研究したいと思い、千葉大学の博士課程に入学しました。この十年間、資料をまとめ、入学してから 3 年近く熱心に勉強し、年 2、3 回現地に行って実地に調査を行い、博士論文のまとめを出来るところまで漕ぎ着けました。

ほかに、8000 語ぐらいホジエン語を採録して、来年には、世界で初めてのホジエン語—中国語—日本語—英語の辞書を作成する予定です。それが出来たら、ホジエン族の言語、文化の研究、更にツングス満州語に対する研究も続けていきたいと考えています。これらは民俗学的に大きな意義があると思っています。私は、一生、この研究を続けて行きたいと思っており、これからはホジエン族だけでなく、アムール流域の同じような諸民族の長い歴史、文化の交流、相互の影響等について研究を続け、さらには文化的に共通な遺産を有すると思われる日本のアイヌ民族についても調査して、その源流を解明したいと考えています。